

# 英語教師のための言語学

山 田 政 美

## I プロローグ

すでに、山田 (1984) で、あるいは山田 (1992) で、英語教育の中での言語学の果たす役割や、英語教師養成のためにその知識が急務であることを述べてきた。(また、小笠原 1985)。

しかしながら、コミュニケーションのための英語とか、「話す・聞く」を重視する「意思疎通能力の育成」が叫ばれると、もっぱら「英語を話せる」ことが教師にも生徒にも最大の目的であるかのように考えられてきたのではない<sup>1)</sup>、したがって、英語という言語と、それを話す人々の文化が疎かにされたという感が強い。ありきたりの英語とその文化の知識だけを背景にしての授業には、限界が見え過ぎている。

状況は異なるが、Freeman and Freeman (1993) の 'language-minority high school students' への実践を読むと、第2言語を習得しようとする生徒たちが下す授業への評価は、

1. I was able to participate more in this class because of the way it was conducted.
2. Working in groups helped me.
3. The teacher(s) made an extra effort to help us understand the material and learn more.
4. The class was presented in an interesting way.
5. There were many different types of activities that benefited us.
6. I was ready for the tests because we studied, discussed, and reviewed the material in class several different ways.
7. I liked this class because I learned.
8. I learned some skills in this class that I can use in my other classes next year.

などについてのものであったが、これらは日本での英語教育の場での評価を得る場合にも考えうる観点であって、重要な問題点を提示している。このようなとき、これらを満足させるために、果たして教師は単なる授業運びのテクニックだけに苦慮すればよいか、と問えば、即座に「否」である。

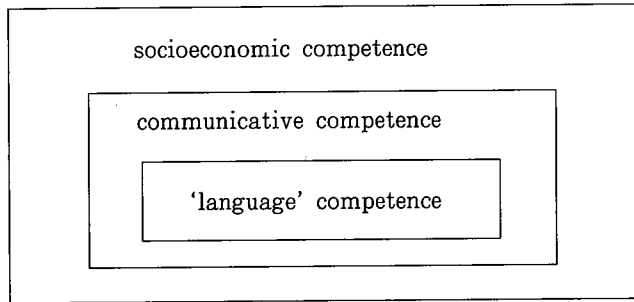
目標言語 (target language) と、その使用者の文化を十分に承知していなければ、教材の理解にも、その活用にも幅が出ないため、生徒の関心を引き付けておくことができない。さらには、何をもって生徒の成就感の基とするか、という出発点が見えないことになる。Cazden (1986), Enright (1986), Freeman *et al.* (1987), Lindfors (1982) などを再検討してみるとよい。

さらに、近年、猫も杓子も Communicative Language Teaching を口にするが、Nattinger (1993) は興味深い指摘をしている：

Currently, a method for second language teaching that call itself "communicative" is developing; specifically, this method is known as Communicative Language Teaching (CLT). Although work on it is still preliminary, CLT has the possibility of being less vague than former "communicative competence" methods, less limited than notional functional ones, less ethnocentric than many humanistic methods, and less psycholinguistically objectional than audiolingual ones. CLT practice is quite diverse, yet underlying all of its variations are these similarities: 1) communicative competence is the goal at each

level of instruction, 2) interaction between language users and their environment is a primary objective of all exercises, and 3) the process involved in using language, that is, the strategies for making sense of something and for negotiating meaning, are the center of attention.

かねて、competence はどのように解すべきかを提唱してきた (cf. Neustpuný 1977)。それは以下のモデルとなる:



したがって、ある一つのコミュニケーション行為が遂行されるためには、そのコミュニティーのメンバーが様々なタイプの、かなりの数のルールを適用していることが分かる。Neustpunýは、オーストラリアにおける移民と'language planning'の問題を考えると基本モデルとして提示したのだったが、これは competence を取り上げて英語教育を再構築するときに、優れて有力である。

## II 英語教師のための言語学

### 1. Language Competence

確かに、これは英語の'language rules'に係わる competence であって、このモデルの位置は小さく見えるが、あくまでも目標言語を考える場合には中心面 (central) であって、これ自体伝統的な学校文法的捕らえ方の範囲から出ないとすれば、このモデルの外の2つの competence とは連続性のないものになってしまう。*wanna* が、英和辞典類が、たとえ「((米略式・英方言))」(『ジーニアス英和』)と記述しようとも、それを越えた言語学的な知識と、解釈力を備えていなければ、英語教師としては不十分だと考える。

まず、Radford (1982) の「接語化」(cliticization) という、縮約 (contraction) の過程がある。一方が他方に付加されて独立性を失うと、接語 (clitic) となる。次に、接語が音声上短縮される過程で、縮小 (reduction) によって強勢を失い、母音の弱化または母音・子音の削除や、同化 (assimilation) を受ける。

*want* # *to* は、まず 'want+to' となり、1語となる [つまり、接語化する]。次に、音韻規則によって *wanna* と縮小され、*to* が強勢を失う。\**wan-very-much-na* のように、2つの要素間に別の語句が挿入できない事実は、ここに接語化が行われた証拠だと言ってよい。

いま一つは、

1. a. Who do you *want* to succeed? (だれに成功して欲しいと思うのか/だれの跡を引き継ぎたいのか)
- b. Who do you *wanna* succeed? (だれの跡を引き継ぎたいのか)

の2文を比較検討したときに分かる問題がある。

[1b] では、Who は succeed の目的語にしか解釈できない。[1a] では、Who は succeed の主語とも、目的語とも解釈できるのに、である。Fiengo (1974) が提唱した「痕跡理論」(Trace Theory) がこれの違いを説明できる。

2. a. Who<sub>i</sub> do you want [t<sub>i</sub> to succeed]?
- b. Who<sub>i</sub> do you want [PRO to succeed t<sub>i</sub>]

[2a] では、*wh-* 移動適用後も *want* と *to* の間の痕跡が存在しており、*wanna* の縮約を邪魔しているのである。

別の説明をしてみよう。

3. Who do you want to see \_\_\_\_\_ ? (君はだれに会いたいのですか)

は、

4. Who do you *wanna* see?

と縮約できるが、

5. Who do you want \_\_\_\_\_ to see Bill? (君はだれがビルに会うことを望むか)

は縮約ができない。\_\_\_\_\_ の位置に、移動した *who* の痕跡が残っていて、その痕跡が *want* に *to* を付加する接語化を阻止しているからである。

したがって、前出の英和辞典類の表層的記述では、*wanna* の振る舞いが分からず、その語のごく一部だけを見ていることになる、と言いたいのである。

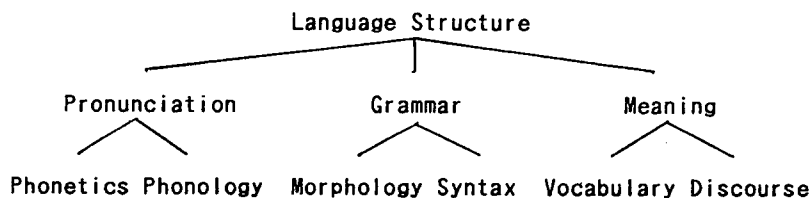
*RHD*<sup>2</sup> (1993) には、次のような不思議な記述がある：

In a development emphasizing the idea of companionship, *COHORT* has also come to mean a single companion, associate, or the like: *The senator strode into the room followed by his faithful cohort, his son-in-law.* (s.v. *cohort*, Usage)

本来は「(古代ローマの) 歩兵隊」を指す語で、後に「群れ、グループ、一団」を表す語として使われてきたのだが、なぜ *RHD*<sup>2</sup> がわざわざ語法の注を入れたのか、興味深いはずである。つまり、本来は集合体を表す語が 'a single companion' を指す意味用法をなぜ生み出したのか、である。恐らくはこの言語使用者たちの頭の中では、一種の異分析現象が起こったのではないか。つまり、*co+hort* の分析をして、一方にある *coauthor* [*co+author*], *coworker* [*co+worker*] がこの引き金になったと疑って十分である。

こと語彙の文法を扱う場合には、この種の言語使用者がもつであろう無意識の言語意識を探ることも必要なことである。<sup>2)</sup>

ここには、わが国の英語教師(と学習者)のための学校文法の再構築という大きな問題があるのであって、そのための視点もすでに提示した(山田 1984)。<sup>3)</sup> そこには、おおよそ次のような言語構造のデッサンがあるわけである(*cf.* Crystal 1976)。



## 2. Communicative Competence

"You're welcome." [山田 1982], "What's your name?" [山田 1986], "Do geese fly?" [山田 1991b], "Yes, ma'am?" [山田 1993b] など具体的に取り上げて、英語の言語使用規則 (language use rules) を知ることの重要性を指摘した。あるいは、言語使用場面での 'Gambit' についても解説した (山田 1991a)。

人の注意を引くための言い方を分析してみよう：

〈Formal〉

1. To a stranger.

a. *Excuse me.*

b. *Pardon me.*

2. To a teacher inside or outside of class.

*Excuse me/Pardon me, Dr./Mr./Mrs./Miss/Ms + LN (Last Name)*

3. To a clerk in a store.

*Excuse me/Pardon me, could I have some help?/could you help me?*

4. In a restaurant to the waitress. 4)

*Excuse me, Miss.*

In a restaurant to the waiter — a male waiter is not addressed.

<Informal>

5. First Name, ...

6. *Hey*, First Name, ...

したがって、次のようなダイアログを準備する：

1. ' A: Excuse me, Dr. Grimes.

B: Yes?

A: Would you please repeat your last question?

B: Certainly. What are two major causes of World War II?

6. ' A: Hey, John!

B: Oh, hello.

A: I haven't seen you for such a long time. How are you?

B: I'm fine, just very busy.

(cf. Kettering 1975)

もちろん、応答のための正確な慣用表現を理解しておく必要がある。例えば、Spears (1992), Lee (1983) などが手っ取り早く、また有益である。あるいは、山田・田中 (1985)、山田・田中 (1986) で研究したような資料をもたなければ、適切な教材編成もかなわない。

前節では特に取り上げなかったが、対照言語学 (Contrastive Linguistics) の知見とか研究手法が必要であり、このことは言語行動の対照研究についても言えよう。国立国語研究所 (1984) は、日本語とドイツ語について考察した。(cf. 石綿・高田 1990)

オハヨウ : *Guten Morgen*

コンニチハ : *Guten Tag*

という対応が一応は得られる。しかし、それぞれの表現の働きを見ると、それほど単純ではないようである。まずは、使用時間の対照をしてみても、さほどの問題は出ない。ところが、「オハヨウ」「コンニチハ」は、単に時間だけの差ではないようである。「コンニチハ」は、相手との関係によって使える場合と、使えない場合とがあるということである。職場や学校などで「毎日のように決まって顔を合わせる相手」には使いにくいようである。その典型は家族の間で、夫婦や親子が家庭内で「コンニチハ」とはまず言わないだろう。

あるいは、「客」と「店の人」との間で、ごく親しい店は別として、日本では、専門店からデパートまでおよそ客のほうが「コンニチハ」とあいさつすることはしない。この点がドイツ語とは異なるというのである。客が、店員と顔を見合わせることもなく店に入り、黙って店を見回すという行動をとると、客であるというよりは、何か不愉快な人物が来た、という印象を与えるというのである。

英語の "Good morning." については、Ferguson (1976) が興味深い指摘をしているが、山田 (1984) を参照され

たい。

もっとも、「あいさつ」はやっかいなトピックであり<sup>5)</sup>、一筋縄ではいかない。交感的言語使用(phatic communion)の好例であって、例えば Berne (1966) は “8-stroke ritual” の例を挙げている：

A: Hi!

B: Hi!

A: Warm enough for ya?

B: Sure is. Looks like rain, though.

A: Well, take care of yourself.

B: I'll be seeing you.

A: So long.

B: So long.

### 3. Socioeconomic Competence

ここでは、社会言語学 (Sociolinguistics) とか人類言語学 (Anthropological Linguistics) が精力的に研究し、成果を挙げてきたところに負うところが大きい。英語教育の立場からは、荒木・安井 (1992) が収録する記述を読みたい (s.v. sociolinguistics)。

呼びかけ語のエピソードを一つ挙げる：

思いもよらずフィリピンの有力政治家を怒らせたことがある。

相手は、40歳そこそこながら、元閣僚。その職を解かれた後、数少ない野党議員として活発に働いているT氏。立食パーティーで、T氏を囲んだ記者たちの間に割り込み、やや嫌みな質問をしたら、急に「侮辱するのか」と怒り出した。私の弁明と、「原因は言葉のカベ」というまわりのとりなしで、ことなきをえた。

この「カベ」とは何か。

英語の下手もさることながら、私は質問の中で敬称をはさまなかった。地元記者や、外国人でもベテランは、話の途中、何度も「大臣」と繰り返した。「それを怠ったのが本当の原因」と、さる消息通は教えてくれた。

T氏に限らない。この国では、しかるべき人と話す場合、こうした敬称を、ふんだんに使わねばならない。

敬称として使われるのは、主に相手の肩書である。大臣や議員はもちろん、医者や弁護士と話す場合も、いく言か目には、相手の肩書をはさみ、次に続けていくのだ。一般的な敬称「サー」もいいが、肩書の方がずっと好まれる。とっくの昔にやめた人でも以前の肩書で呼ぶ。(後略)<sup>6)</sup>

名前に関する日英の文化の類似・相違にも注意がいる。Susan M. Ervin-Tripp [米の言語心理学者] のようなハイフン付き姓は何を表すものか。言語がコミュニケーションの有力な手段であるというならば、そこに反映されたその言語文化をよく知る必要があることは、言うまでもあるまい。山田 (1994) では英語におけるこの問題を概観している。

英語教科書では、必ずと言ってよいほど外国 (特に英米) への手紙の出し方が取り上げてある。しかし、宛先とか差出人の書き方を正確に書いて教えているとは限らない。英語圏とは言いながら、カナダとかオーストラリアの例が示されていることは少ない。もっとも日常的な言語と文化の問題であるはずであるのに、である。

山田 (1990a) では、カナダの郵便番号に係わる記述をした論文で誤って解されている例を指摘した。

It was a very Irish bar. No frills. A utilitarian saloon designed for drinkers. *Sawdust on the floor.*—  
Ed McBain, *Downtown*, Mandarin, 1992, p. 147

そこは典型的なアイリッシュ・バーだった。装飾はいっさいない。飲み助向きにデザインされた実用一点ばり

の居酒屋だった。床にはおがくずがまかれている。(羽田詩津子訳『ダウントウン』早川書房, 1990, p. 230)

ここで、「床におがくずをまく」文化はどのようなものが分からないと、この小説の場面は無駄なものになってしまう。Seymour (1987) のような文献もあるのである。つまり、おがくずも床に撒くのに非常に衛生的で具合がよかった。現在でも、よい肉屋ならどこでも床におがくずを撒いているし、良い酒場でもそうしているところがある。

*wishing well* は、「(コインを投げ入れると願い事がかなえられるという) 願かけ井戸」(SRHD<sup>2</sup>) とあるが、果たしてどのようなものが理解しにくい。この語は、『カラー・アンカー英語』にも見当たらない。すでに、山田 (1973) で取り上げたが、その後もいくつかの例が現れた。



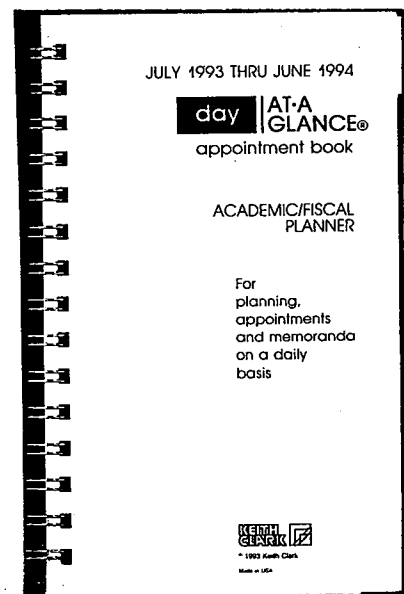
— *The Born Loser* (7/25/82)

日常の言語文化を理解することと言えば、商品名は相当に困難な類の一つである。山田 (1990) はそれを解決するための文献であり、この点は後に常磐 (1993) が取り上げた。

The calendar was of the *Day At-A-Glance* type.—  
Ed McBain, *op. cit.*, p. 55

訳者の羽田詩津子氏は、「スケジュール帳は〈アット・ア・グランス〉のデイ・タイプだった」と訳出しているが、明らかに誤訳である。また、原文 (Mandarin版) も書記形式 (Day と At の間のハイフンの欠落) も誤り。安田 (1993) のインフォーマント調査でも、確かな答えが出なかったというが、幅広いアメリカ文化の中でのことであるから、単にネイティブスピーカーであるだけではどうにもならないわけである。

Day-At-A-Glance デイ・アット・ア・グランス  
米国 Textron Inc. の子会社 Sheaffer Eaton Division  
(Pittsfield, Mass.) 製のアポイントメント・ブック  
(appointment book)、カレンダー・ブック (calendar book)、  
日記帳など。



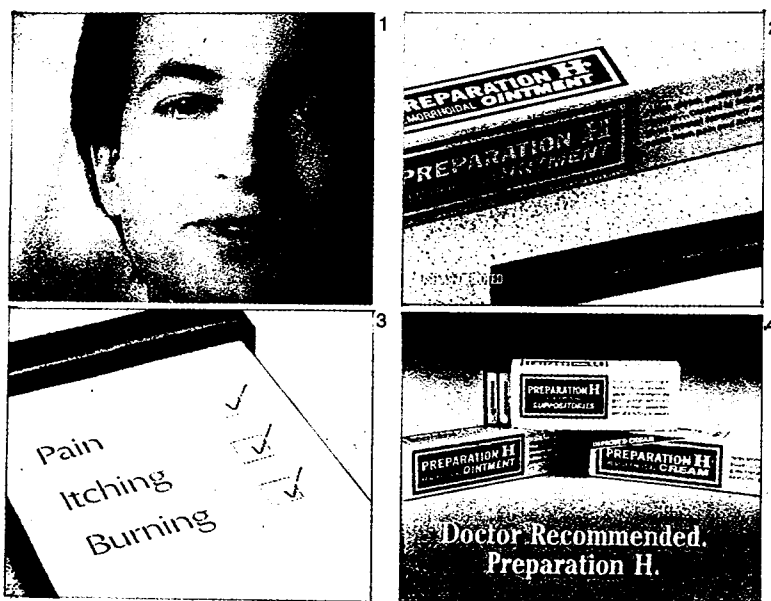
Keith Clark社の“at a glance”表現を入れた、類似のアポイントメント・ブック。Ziggy's *One-Day-At-A-Time* calendarというものもある。

Some of the things Hoke knew from experience and had tried to explain to her—like the fact that junkies sometimes rubbed *Preparation H* on their track marks to reduce the swelling—she knew already.  
— Charles Willeford, *New Hope for the Dead*, Ballantine, 1985, p. 2

ホークが経験から知ったこと—たとえば麻薬中毒患者は腫れを退かせるために痔の塗り薬をすり込むといったこと—を説明しようとする、彼女はすでに知っていた。(沢 万里子訳『マイアミ・ポリス』扶桑社, 1988, p.10)

ここでは、訳者の説明的日本語訳に誤りはない(山田 1990b)。座薬 (suppositories)、クリーム (cream)、軟膏 (ointment) の各タイプがある。<sup>7)</sup> TVコマーシャルでは、次のようなストーリーボードがある。<sup>8)</sup>

Man: I saw my doctor because the pain was so bad. I was afraid I needed surgery for my hemorrhoids. I was itching. The burning was awful. But my doctor said my hemorrhoids weren't serious, I didn't need surgery. He told me it was time I started using Preparation H.  
Narrator: Preparation H helps shrink swelling of inflamed hemorrhoidal tissues and often brings relief from pain, itching and burning for hours.  
Man: What a difference Preparation H makes!  
Narrator: Doctor recommended Preparation H.



このような “Area Studies/Realia” の英語教育における問題については、小笠原・山田 (1991) を見られたい。

### III エピローグ

英語教師のための言語学の構想の枠組を示し、いくつかの具体的な例を挙げてみた。実際には、もっと多くの例に語らせるのがよいが、別の機会に譲ることとする。

言語学が真に貢献することとは、言葉とはどういうものかに対する理解を増すものである、ということにある。(中略) 言語学の価値は、語学教師の言語への認識を高めることでこの教師に一層力を貯えさせ、したがってより優れた語学教師に仕上げるところにある。(Wilkins 1972)

注

- 1) cf. 『『使える英語』教育への転換を』『朝日新聞』社説。1993年8月31日付。
- 2) cf. 衣笠忠司・赤野一郎・内田聖二（編）（1993）, 『英語基礎語彙の文法』東京：英宝社。〔どこまでこの観点から切り込んでいるか、検討する必要がある〕
- 3) この構想に基づいての試論には、Tago（1993）がある。
- 4) レストランでは、ウェーターやウェートレスには呼びかけ語を使わない。もしも、離れた場にいるときは、相手の視線を捕らえるように努めるか、あるいは片手を軽く挙げる。決して、口笛を吹いたり、両手を叩いたり、指を鳴らしたりしてはいけない。
- 5) cf. 『言語』110巻4号（1981年4月号）, 大修館書店。[「あいさつの言語学」特集]
- 6) 「モンスーン—アジア万華鏡」『朝日新聞』1982年1月8日付。岡田特派員による。
- 7) この製薬会社（Whitehall Laboratories）からの医師の処方箋不要の（over-the-counter）売薬でよく知られているものをいくつかを挙げる：
  - Advil*（鎮痛剤）[正確には、抗炎症剤（ibuprofen）。*CoAdvil, Children's Advil* [処方薬などの関連薬がある]
  - Anacin*（鎮痛剤）[アスピリン性。*Anacin-3* もある]
  - Anbesol*（口内各種鎮痛薬）
  - Clearblue Easy*（単一妊娠検査キット/single-component pregnancy test kit）
  - Denorex*（シャンプー・コンディショナー）[shampoo and conditioner。フケ症用]
  - Dondril*（咳止め錠）[anti-cough tablets]
  - Dristan*（風邪・アレルギー・副鼻腔鬱血解消薬。nasal sprayもある]
  - Riopan*（制酸剤）
  - Today*（避妊スポンジ）[contraceptive sponge]
- 8) cf. 曾根田恵三・渡辺幸俊・M.G. Brashear（1992）, 『CMからアメリカが見える』東京：語学新潮社, p. 56.

参 考 文 献

- Berne, E. (1966), *Games People Play: The Psychology of Human Relationship*. London: Andre Deutch.
- Cazden, C. (1986), "ESL teachers as language." In D.S. Enright (eds.) (1986), *Children and ESL: Integrating Perspectives*. Washington, D.C.: TESOL, pp. 7-22.
- Chomsky, N. and H. Lasnik (1978), "A remark on contraction." *LI* 9, pp. 268-274.
- Crystal, D. (1976), "The diagnosis of sociolinguistic problem in doctor-patient interactions." In Tanner, B.A.(ed.)(1976), *Language and Communication in General Practice*. London: Hodder and Stoughton, pp. 40-51.
- Enright, D.S. (1986), "Use everything you have to teach English: Providing useful in-pu to young language learners." In Riggs, P. and D. S. Enright (eds.)(1986), *Children and ESL: Integrating Perspectives*. Washington, D.C.: TESOL.
- Ferguson, C.A. (1976), "Structure and use of politeness formula." *Language in Society* 5:2, pp. 137-151.
- Fiengo, R.W. (1977), "On trace theory." *LI* 8, pp. 35-61.
- Freeman, D., Y.S. Freeman and R.D. Gonzalez (1987), "Success for LEP students: The Sunnyside Sheltered English Programs." *TESOL Quarterly* 21, pp. 361-367.
- Freeman, D. and Y.S. Freeman (1993), "A road to success for language-minority high school students."



- In Cleary, L.M. and M.D. Linn (eds.) (1993), *Linguistics for Teachers*. New York: McGraw-Hill, pp. 612-623.
- Kettering, J.C. (1975), *Developing Communicative Competence: Interaction Articles in English as a Second Language*. Pittsburgh: The University Center for International Studies, University of Pittsburgh.
- Lee, W.R. (1983), *A Study Dictionary of Social English*. London: Pergamon. (山岸勝栄訳『英米対照イギリス口語学習辞典』こびあん書房, 1992)
- Lindfors, J. (1982), "Exploring in and through language." In Clarke, M. and J. Handscombe (eds.), *On TESOL '82*. Washington, D.C.: TESOL, pp. 143-156.
- Nattinger, J. R. (1993), "Communicative language teaching: A new metaphor." In Clarke, L.M. and M. D. Linn (eds.) (1993), *Linguistics for Teachers*. New York: McGraw-Hill, pp. 599-612.
- Neustupný, J.V. (1977), "Language planning in Australia." *Language Science* 45, pp. 29-31.
- Radford, A.(1981), *Transformational Syntax: A Student's Guide to Chomsky's Extended Standard Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Seymour, J.(1987), *Forgotten Household Crafts*. London: Dorling Kindersley.(生活史研究所訳『イギリス生活誌。道具と暮らし』原書房, 1989)
- Spears, R.A. (1992), *Common American Phrases in Everyday Context*. Lincolnwood, Ill.: NTC.
- Tago, Fumiko (1993), "An English grammar for the Japanese teachers of English: Its critical aspects." Unpublished MA Thesis.
- Wilkins, D.A. (1972), *Linguistics in Language Teaching*. London: Edward Arnold.
- 荒木一雄・安井 稔(編)(1992),『現代英文法辞典』東京：三省堂。
- 石綿敏雄・高田 誠(1992),『対照言語学』東京：桜楓社。
- 小笠原林樹(1985),「英語教育と英語教師の質」*ELEC BULLETIN*, 1985 Spring, pp. 2-7。
- 小笠原林樹・山田政美(1991), "Area Studies/Realia", 安藤昭一(編)(1991),『英語教育現代キーワード事典』大阪：増進堂, pp. 465-467。
- 国立国語研究所(1984),『言語行動における日独比較』国立国語研究所報告 80。東京：三省堂。
- 常磐新平(1993),「アメリカの街角で—アメリカは固有名詞がいっぱい」,『NHKラジオ英会話』1993年10月号。日本放送出版協会, pp. 80-84。
- 安田順一(1993),「アサインメント#5」島根大学教育学部教育研究科(英語専修)「英語学演習Ⅱ」での提出ペーパー。
- 山田政美(1973),『英語語法あ・ら・かると』東京：文建書房。
- (1982),『現代アメリカ語法—フィールドノート—』東京：研究社出版。
- (1984),「言語学と英語教育」,『島根英語教育』島根大学教育学部英語教育研究室, pp.1-18。
- (1986),『アメリカ英語の最新情報』東京：研究社出版。
- (1990a),「ことばと文化—アメリカ英語文化の研究」, 澤田治美(編)(1990),『ことばと文学と文化と』東京：英潮社新社, pp. 389-402。
- (1990b),『英和商品名辞典』東京：研究社。
- (1991a), "Gambit", 安藤昭一(編)(1991),『英語教育現代キーワード事典』大阪：増進堂, pp. 83-89。
- (1991b),『アメリカ英語文化の背景』東京：研究社出版。
- (1992),「期待できる英語教師を得るために」, 英語教育実践講座刊行会(編)(1992),『英語教育の歴史と展望』ECOLA英語科教育実践講座。第17巻。東京：ニチブン, pp. 265-266。

山 田 政 美

- (1993), 『現代アメリカ英語を追って』東京：研究社出版。
- (1994), 「ネーミングとキャッチフレーズの社会言語学」, 『英語教育』42巻12号 (1994年1月号), 大修館書店, pp. 23-25。
- 山田政美・田中芳文 (1985), 「アメリカ英語におけるインビテーション表現の様態」, 『島根大学教育学部紀要』人文社会科学編。島根大学教育学部, pp. 113-121。
- (1986), 「アメリカ英語における謝罪の表現」, 『島根大学教育学部紀要』第20巻。人文社会科学編。島根大学教育学部, pp. 47-54。

[RHD<sup>2</sup>] *The Random House Dictionary of the English Language*. 2nd ed. New York: Random House. 1987<sup>2</sup>.

[SRHD<sup>2</sup>] 『小学館ランダムハウス英和大辞典』第2版。東京：小学館。1994<sup>2</sup>。

[『カラー・アンカー英語』] 『カラー・アンカー英語大事典』東京：学習研究社。1984。

[『ジーニアス英和』] 『ジーニアス英和辞典』改定版。東京：大修館書店。1994。

(やまだ まさよし・学校長・島根大学教授・英語学)